

小学校外国語活動の現状と展望

－課題解決的な学習活動の展開－

牧原 勝志〔鹿児島大学教育学部附属教育実践総合センター〕

Current Situations and Prospects of Foreign Language Activities in Elementary Schools: The Development of Task Solving Activities

MAKIHARA Katsushi

キーワード：小学校外国語活動，新学習指導要領，コミュニケーション能力の素地，連携，課題解決型

1 はじめに

昭和61年の臨時教育審議会答申にある、「英語教育の開始時期の検討」をかわきりに、公立小学校における英語教育の研究開発が全国的に行われ、平成10年に改訂された指導要領で、総合的な学習の時間の中で外国語会話等（以下、英語活動）が行われるようになった。この、今からほぼ10年前の指導要領改訂に公立小学校における英語教育のターニングポイントがあった。つまり、これを機に、全国で国際理解の一環としての英語活動が、各地域・各学校の特色や実態を生かして、様々な形で行われるようになったのである。平成13年に、文部科学省から「小学校英語活動実践の手引き」が出され、英語活動のねらいや活動の進め方、指導内容等について示されたが、これはあくまでもガイドラインであり、その後、先行研究やこれまでの実践を生かした活動が全国各地で展開されてきた。そして、それからまた10年が過ぎ、今回の学習指導要領改訂（平成20年）により、これまでの取組の成果を生かしつつ、国として共通に指導する内容を示す必要などから、小学校5・6年生に必修として外国語活動が導入されたわけである。

そこで本稿では、鹿児島県を中心とした英語活動（外国語活動）への取組の状況を踏まえ、新学習指導要領における外国語活動の目標・内容の中学校・高校との連携を考慮しながら、コミュニケーション能力の素地を育成するために、どのような外国語活動の授業を展開していけばよいかについての一考察を述べることにする。

2 本県における小学校外国語活動の取組状況

小学校英語教育に関する鹿児島県内の取組としては、ここ10数年にわたって、「レッツ・ビギン、英語に親しむデイリーライフ事業」「英語大好きかごしまっ子育てプラン」「小学校英語教育推進事業」「小学校外国語活動実践研究事業」「小・中連携英語教育研究事業」等の各種事業を県教育委員会が推進してきている。その中で、県教委の研究指定校や拠点校、市町村教育委員会の研究協力校、地域の特性を生かした特別の教育課程を編成する教育特区指定を受けての研究等の実践的な成果が県内各学校に還元され、各学校の取組意識の高揚や教員の指導力の向上につながっている。

著者もここ10数年、県内各地の研究公開、教育委員会・各種研究団体主催の研修会、各学校の校内研修会等に参加し、外国語活動の取組状況の把握に努めてきた。その取組状況の概要を以下のように捉えている。

(1) 共通する授業づくりの基本的な考え方

- ア 小学校段階で英語嫌いをつくらない。
- ・ 平成の初めころから、英語活動の授業づくりの大前提として言われてきたことである。（中学校へのより良い接続のためにも）
- ・ 楽しいことが第一義で、楽しさが学習意欲を高めるという考え。（ゲームやごっこ遊び、歌、チャンツ等を通して）
- ・ 英語を教える授業というよりも、子どもと一緒に英語活動を楽しむという授業。

- イ 音声を中心とした活動の場の設定。
 - ・ 英語をコミュニケーションの手段として捉える。
 - ・ 英語を覚える授業というより、英語を使おうとする授業。(忘れても繰り返しやればいい)
 - ・ まずは、イングリッシュ・シャワーを十分に浴びて「聞く」ことから、そして、聞いたことを真似て「話して」みることへ。
 - ・ 身振り手振りなどのジェスチャー、表情も大事にして。(非言語コミュニケーションの有効性)
- ウ 活動の場の臨場感、英語を使う必要感を大切にす。
 - ・ 英語を使いたくなる、英語を使わざるを得ない場面や活動の設定。
 - ・ 子どもの発想を膨らませる場面の設定。
 - ・ 意図的英語の世界の設定。(目の前にある英語を使った現実世界の体験、道具や掲示物、環境構成の工夫)

(2) 授業研究会、研修会等での話題の中心

- ア 平成10年の指導要領改訂から平成20年の指導要領改訂以前
 - ・ 総合的な学習の時間における英語活動の基本的な考え方
 - ・ 英語活動の授業の考え方、進め方
 - ・ 授業の準備から展開時の留意事項
 - ・ 担任とALT(AEA)の役割やチーム・ティーチングの方法、打合せの仕方
 - ・ 教材や教具の作り方
 - ・ ゲームやスキット、歌、チャンツ等の具体的な内容や効果的な活用の方法
 - ・ 年間指導計画の作成の仕方
 - ・ 子どもの発達特性と活動内容
 - ・ 文字指導の導入の仕方
 - ・ 英語活動と中学校英語教育との関連や連携
 - ・ 英語活動の評価の内容や方法
 - ・ 教員の指導力・英語力の向上
 - ・ 英語活動を日常生活に生かす手立て
 - ・ 英語活動の現状と今後の課題

- イ 平成20年の指導要領改定以降
 - ・ 外国語活動の目標、内容、授業の進め方
 - ・ 外国語活動の授業づくりのポイント
 - ・ これまで実践してきた英語活動と外国語活動の考え方や進め方の違いや共通点、留意事項
 - ・ 4年生以下の英語活動と5・6年生の外国語活動の捉え方、進め方
 - ・ 4年生以下の英語活動の授業時数の生み出し、教育課程の編成
 - ・ 外国語活動の指導計画作成上の留意点(これまでの指導計画の生かし方、英語ノートをもとにした指導計画の作成の仕方)
 - ・ 内容の系統性を考慮した指導計画の作成の仕方
 - ・ 英語ノート活用についての基本的な考え方及び活用方法
 - ・ 電子黒板の効果的な活用方法
 - ・ 外国語活動の評価の観点及び具体的な評価方法
 - ・ 小・中連携を考慮した指導の在り方
 - ・ 校内職員研修の進め方(内容や方法)

(3) 一般的な授業展開例

一単位時間の基本的な学習の展開は、次のようなものが多い。

過程	主な学習活動
導入	1 学習の雰囲気作りをし、学習内容をつかむ。(挨拶、歌、スキットを見る、目当てを立てる等)
展開	2 活動を通して、英語表現への親しみや異文化理解等を深める。(ゲーム、ごっこ遊び、スキット、チャンツ、調べ活動等)
終末	3 今日の学習を振り返る。(スキット発表、感想の交流、自己評価等)

現在、県内の各学校で行われている外国語活動の授業展開の一般的な具体例として、日置市内のI小学校の授業展開例を紹介する。

過程	活動内容	児童の活動
意欲をもつ	1 挨拶	・ 始めの挨拶をする。
	2 歌	・ 歌を歌う。
つかむ	3 目当て	・ スキットを見る。 ・ 聞き取った言葉や会話の内容を予想して発表する。 ・ 今日の目当てをつかむ。
	4 チャンツ	・ リズムに合わせてチャンツをする。
挑戦する	5 アクティビティ1	・ ゲームなどを通して英語の音声や表現に慣れ親しむ。
	6 アクティビティ2	・ 本時の表現や知っている表現を使って友達とのコミュニケーションを図る。 ・ 友達とのやり取りの様子を発表する。
振り返る	6 振り返り	・ 本時の感想を発表する。
	7 挨拶	・ 終わりの挨拶をする。

(4) 取組状況のまとめ

前述の2の(1)から(3)までの状況を総括すると、以下のようなことが概観できる。

ア これまでの取組の成果

- ・ 小学校における英語活動(外国語活動)の基本的な考え方や授業の進め方等についての研究会や研修会が盛んに催され、それらの成果を共有する形で、各学校での取り組みが活性化されつつある。
- ・ 研究開発学校や研究指定校、特区による研究の推進等により、県内の各地で共通の考え方を基にした英語活動(外国語活動)の授業展開例が構築され、汎用化が進められている。
- ・ 市町村教育委員会や地域を単位とした年間指導計画の基底や指導の手引等の作成も進められており、地域単位での指導

内容や指導法の共有化が図られつつある。

- ・ 各地域や各学校に、中心となって英語活動(外国語活動)を推進する教員が育ってきつつある。
- ・ これまでの英語活動への取組は消極的であった教員にも、学習指導要領の改訂もあり、外国語活動の指導を自分のこととして捉え、積極的に取り組もうとする意識が育ちつつある。
- ・ 市町村によっては、独自の予算で英語指導助手を雇用したり全学校に電子黒板を導入したりするなど、外国語活動の本格実施に向けて、指導法改善や学習環境の整備に力を入れている。

イ 今後の課題

- ・ 地域全体、県全体の実践的な取組の水準は向上しているが、研究校と一般校の学校全体の取組意識の差や実践の度合い、各学校の教師一人一人の取組意識や指導力の差などについて、まだ改善すべき余地がある。
- ・ 新学習指導要領の目標・内容理解を深めた授業展開の工夫が必要である。
- ・ 総合的な学習の時間の国際理解の一環として行われてきた英語活動と、必修として行われる外国語活動の共通点や違いを見極めた学習指導の展開の在り方について、今後、研究・実践を深める必要がある。
- ・ 英語ノートの活用を図りながら、子どもや学校、地域の実態に合った学習内容を選定し、指導計画の充実を図る必要がある。
- ・ 経験の少ないことを学ぶという外国語活動の特性から、教師の支援を学習の基本としながらも、子どもの好奇心に訴え、子ども自らが興味・関心を広げて学習を進めていくような授業展開の工夫が求められる。
- ・ これまでの単純な活動の繰り返しという一般的な学習の流れに慣れてしまい、やや活動が停滞したり、学習に意欲を持てなかったりする子どもたちに対する手立ての方法を考える必要がある。

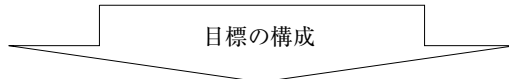
3 目標分析から見る外国語活動の指導の重点

現在、移行期間にあり、平成23年度から完全実施される新学習指導要領の外国語活動の目標につ

いて、中学校・高校の外国語科の目標と比較しながら分析し、今後の学習指導の方向性を考えてみる。

【図1 小・中・高校の目標・構成】

小学校外国語活動の目標	中学校外国語科の目標	高等学校外国語科の目標
外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。	外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う。	外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、情報や考え方などを的確に理解したり適切に伝えたりするコミュニケーション能力を養う。



目標の構成			
	小学校外国語活動	中学校外国語科	高等学校外国語科
①	外国語を通じて		
②	言語や文化について体験的に理解を深め	言語や文化に対する理解を深め	
③	積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り		
④	外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら	聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う	情報や考え方などを的確に理解したり適切に伝えたりするコミュニケーション能力を養う
⑤	コミュニケーション能力の素地を養う		

(1) 目標構成の特徴及び比較

ア 外国語の取り扱い

上記図1の小・中・高校の目標を比較してみると、まず、共通の表現は、①「外国語を通じて」である。この外国語とは、小学校では英語を取り扱うことを原則とするとされ、中学校では英語を履修することが原則とされている。また、高校では、外国語科に属する英語に関する科目及びその標準単位数を定め、英語を履修させる場合は7つの英語科目にそれぞれの目標を設定して内容もおかれている。

小・中・高校においては、地域の実情や

学校の実態に応じてその他の外国語を扱うこともできるが、世界で広くコミュニケーションの手段として用いられている実態や、これまでほとんどの学校で英語を履修してきたこと、小・中及び中・高の関連指導に関する点からも、英語を履修させることが一般的である。そして、外国語活動・外国語科としては、「外国語を通じて」という特有な方法によって目標の実現を図ろうとすることを明らかにしたものである。

イ 言語や文化の理解

次に、②の「言語や文化に対する理解」である。小学校においては、子どもの柔軟

な適応力を生かして、言葉への自覚を促し、幅広い言語に関する能力や国際感覚の基盤を培うために、国語や我が国の文化を含めた言語や文化に対する理解を深めることの重要性を述べたものである。中学校・高校では、言語の仕組み、言葉の意味や働きなどが分かるようになること、言葉の背景にある文化に対する理解を深めることの重要性を述べたものである。

ここで、小学校と中・高校との違いは、小学校段階では知識のみで理解を深めるのではなく、「体験を通して」理解を深めるということで、子どもの発達を考慮した体験的な学習活動の必要性が言及されている。

ウ コミュニケーションへの積極的な態度

また、上記③の「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り」は、小・中・高校に共通して用いられている目標の柱の一つである。小学校におけるコミュニケーションへの積極的な態度とは、外国語の音に触れることによって、外国語を注意深く聞いて相手の思いを理解しようとしたり、相手に自分の思いを伝えることの難しさや大切さを実感したりしながら、積極的に働きかけようとする態度などのことである。中学校では、身に付けた基本的な知識や技能を実際に活用して、積極的に自分の考えを相手に伝えようとしたり、相手の考えを理解したりしようとする態度の育成が大切であると述べられている。さらに、高校では、外国語の学習や外国語の使用によって、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりすることに積極的に取り組む態度を育成することで、異なる文化をもつ人々と協調して生きていく態度に発展していくと述べている。

このように、小、中、高校の各段階で、児童生徒の発達に応じたコミュニケーションへの積極的な態度を育てることが、各学校段階の目標に迫るための共通の柱としておかれていることは意味が大きい。小・中・

高校の学習指導において連携を重視した指導が特に望まれる柱であると考えられる。

エ 外国語への慣れ親しみ

④の「外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら」は、小学校のみにおかれている目標の柱の一つである。子どもの柔軟な適応力を生かして、体験的に「聞くこと」「話すこと」を通して、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しみ、聞く力などを育てることが適当であることを述べたものである。

オ コミュニケーション能力

小学校外国語活動では、⑤の「コミュニケーション能力の素地」を養うことを目標にしている。これは、前述の②③④で述べた目標の3つの柱「言語や文化に対する体験的な理解」「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度」「外国語への音声や基本的な表現への慣れ親しみ」を総称したものである。この3つの柱を踏まえた体験的な活動を意図的・計画的に行うことで、中・高校の外国語科の目標にあるコミュニケーション能力の素地をつくることにつながる。

中学校においては、⑤は目標の3つ目の柱であるが、これを最後に置くことで最も重要であることを強調している。そして、今回小学校に外国語活動が導入され、音声を中心にはぐくまれた素地の上に、「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」の4技能をバランスよく育成することの必要性を捉え、「聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う」とし、高校の「コミュニケーション能力」につないでいる。

このコミュニケーション能力は、「情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりする」ことができる力のことである。これは、外国語の音声や文字を使って実際にコミュニケーションを図る能力のことであり、情報や考えなどを受け手や送り手として双方向に理解したり伝達したりするコ

コミュニケーション能力のことを意味している。また、高校においても、⑤が目標の中核をなすものであるが、中学校と同様に、②③の内容と不可分に結びついているものであり、中学校における学習の基礎の上に、「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」の4技能を総合的に育成する指導を行い、コミュニケーション能力を更に伸ばすことが大切である。

以上のことから、小・中・高校において、「コミュニケーション『能力の素地』『能力の基礎』『能力』」を段階的に捉えた学習指導の系統性を十分に考慮していく必要がある。

(2) 目標の分析から捉える外国語活動の学習指導の方向

ア 言語や文化の体験的理解

言語や文化に対する理解を深めるということは、小・中・高校を一貫する目標の柱である。小学校段階においては、「体験的に」理解を深めるということが、中・高との違いであるから、具体的な指導の方法としては、歌やチャンツなどを活用して英語特有のリズムやイントネーションを体得させたり、さまざまな国や地域の食生活や遊び、行事などを取り扱ったりすることが大切である。また、ALTや留学生、地域に住む外国人などとの交流活動も授業に位置付けたりする必要がある。

イ コミュニケーションへの積極的な態度

積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成についても、小・中・高を一貫する目標の柱である。コミュニケーション能力を高校までの段階で育むために、小学校でその素地としての積極的な態度を授業の中でどのように培っていくかが大切になってくる。特に、小学校では英語の音声を重視してゲームや遊びなどを通して、コミュニケーションの楽しさを味わう活動をたくさん取り入れる必要がある。

ウ 外国語への慣れ親しみ

上記ア、イに関する活動を外国語を通し

て行うことで、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませることができるように、活動の種類や方法を工夫していく必要がある。

エ 上述のア、イ、ウについては、一授業時間にそれぞれが独立して行われることはなく、コミュニケーション活動等の中で、相互に関連しながら、補完し合いながら展開されるものとして捉えておく必要がある。

4 内容分析から捉える外国語活動の指導の重点

前述の目標を達成するために、外国語活動におかれている内容の具体例について、中学校外国語科の内容と比較しながら分析し、小・中連携も考慮してその取り扱い方法を考察してみる。

小学校外国語活動では、5・6年生の2学年を通じて達成される内容として、「主としてコミュニケーションに関する事項」と「主として言語と文化に関する事項」の2つがおかれている。そして、それぞれに3つの指導内容が設定してある。また、中学校外国語の英語の内容は、英語を理解し、英語で表現できる実践的な運用能力を養うために、3学年間を通じた「言語活動」と「言語材料」からなっている。

ここで、小・中連携を考慮した指導を考えると、中学校の言語活動の取扱いの配慮事項として、第1学年では「小学校における外国語活動を通じて音声面を中心としたコミュニケーションに対する積極的な態度などの一定の素地が養われることを踏まえ、身近な『言語の使用場面』や『言語の働き』に配慮した言語活動を行わせること」となっている。この点に着目してみると、小学校外国語活動の内容の取扱いでも、「コミュニケーションの場面」と「コミュニケーションの働き」を取り上げるようになっていく。

この2点について、小学校と中学校を比較したのが表1である。

表1から、小学校のコミュニケーションの場面と中学校の言語の使用場面は、どちらも同じ「特有の表現が使われる場面」と「身近な暮らしに関わる場面」の二つに分けられている。その具体例も、ほぼ同じで、「電話での応答」「旅行」などが

【表1 場面と働きの比較】

	小学校外国語活動	中学校英語
(小)(中) 言語の使用場面 コミュニケーションの場面の例	特有の表現がよく使われる場面 ・あいさつ ・自己紹介 ・買物 ・食事 ・道案内 など	・あいさつ ・自己紹介 ・買物 ・食事 ・道案内 ・電話での応答 ・旅行 など
	身近な暮らしに関わる場面 ・家庭での生活 ・学校での学習や活動 ・地域の行事 ・子どもの遊び など	・学校での生活 ・学校での学習や活動 ・地域の行事 など
(小)(中) 言語の働きの例 コミュニケーションの働きの例	相手との関係を円滑にする (礼を言う、褒める、丁寧表現)	コミュニケーションを円滑にする ・呼び掛ける ・相づちをうつ ・聞き直す ・繰り返す など
	気持ちを伝える (気持ちを伝える)	気持ちを伝える ・礼を言う ・苦情を言う ・褒める ・謝る など
	事実を伝える (事実を伝える)	情報を伝える ・説明する ・報告する ・発表する ・描写する など
	考えや意図を伝える (発表する)	考えや意図を伝える ・申し出る ・約束する ・意見を言う ・賛成する ・反対する ・承諾する ・断る など
	相手の行動を促す (道案内をする)	相手の行動を促す ・質問する ・依頼する ・招待する など

中学校に付け加えられている程度である。また、「子どもの遊び」という例は中学校にはなく、小学校の子どもの発達段階を考えた例示がしてある。

そして、コミュニケーションの働きと言語の働

きについても、小学校と中学校の分類が5つに統一され、対応関係が分かりやすくなっている。中学校においては、それぞれ項目に具体例が示してあるが、小学校では項目のみが示されている。小学校学習指導要領解説の外国語活動編にはその代表例がいくつか示されているが、表1の小学校外国語活動の各項目の下に括弧書きしてあるものがその例である。

これらの例示は、外国語でのコミュニケーションを体験させるときの例であり、これらに限定されるものではないが、コミュニケーション・言語の使用場面やコミュニケーション・言語の働きの具体的な英語表現例を比較してみる。

・【場面】 あいさつ

(小) A : Hello. How are you?

B : I'm fine, thank you.

A : Nice to meet you.

B : Nice to meet you, too.

(中) A : Good morning. How are you?

B : Fine, thank you. How about you?

A : How are you doing?

B : I'm all right, and you?

・【働き】 褒める

(小) That's right. Good.

(中) Good job. Wonderful!

What's a nice dress!

上記は、英語の表現例の一部であるが、小学校段階での基本的で簡易な表現に加えて、中学校では、場面や状況を判断して表現内容が広がったり深まったりしている。つまり、中学校においては、実際に言語を使用して互いの考えや気持ちを伝え合うような活動の中では、表現しようとすることを個々の生徒が考え、ふさわしい表現を選択できるようにしていくことが必要である。

小学校段階では、その素地をつくるのがねらいであるので、コミュニケーションが行われる場面を表す「コミュニケーションの場面」と、コミュニケーションを図ることで達成できることを表している「コミュニケーションの働き」を十分考慮した、体験的なコミュニケーション活動を意図的に位置付けていく日常の授業展開が大切になってくる。

5 今後の外国語活動の授業展開

ここまで、本県の外国語活動への取組状況及びその成果と課題、新学習指導要領における外国語活動の目標・内容の分析と中・高校との連携指導の観点等について述べてきた。

そこで、ここからは、これまでの取組の成果や課題、小・中・高校の連携を踏まえて、今後どのような外国語活動の授業を行っていけばよいかについて述べる。

(1) 授業づくりの方向

ア これまでの取組の成果である授業づくりの基本的な考え方を生かしていく。つまり、小学校段階で英語嫌いをつくらない。「聞くこと」「話すこと」の音声を中心としたコミュニケーション活動を設定する。活動の場の臨場感、英語を使う必要感を大切にするという3点については、英語活動が外国語活動になっても変わらない点として捉えて授業設計をする。

イ 中学校、高校との連携を進める上で、英語の音声や基本的な表現に慣れ親しみながら言語や文化の体験的な理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成するコミュニケーションの場面やコミュニケーションの働きを具体化するコミュニケーション活動を授業に位置付けていく。

ウ これまでの一般的な学習の流れに見られた単純な活動の繰り返しに慣れてしまい、活動が停滞したり意欲的に学習に参加できない子どもたちがいたりする傾向があるので、子どもの知的好奇心を刺激し、教師の支援を受けながら子ども自らが主体的に学習活動を展開できるようなコミュニケーション活動の工夫や学習過程への位置付けについても考慮していく。

(2) 具体的な授業展開例

前述の授業づくりの方向ア、イ、ウの中で、子どもにコミュニケーション能力の素地を養うことを目指すためには、どの視点も重要ではあるが、これまであまり着目されていなかったウの視点に特に焦点を当て、筆者の

これまでの授業実践をもとに具体的な授業展開例を示すことにする。

ア 学年・単元名

第6学年・「ショッピングを楽しもう」

イ 授業づくりの基本的な考え方

本実践では、ALTやHRT、友達との楽しいコミュニケーション活動を通して、子どもたちが英語の音声や表現に慣れ親しみながら言語や文化の体験的な理解を深め、自分の周りにいる人と積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を主なねらいとする。その際、教師の支援を受けながら、「こんな活動をやってみたい」「こんな英語を言いたい」などの子ども自らがもつ課題意識を大切にし、その課題を解決するための方法を子ども自らが考え、挑戦していくことで子どもの知的好奇心を満たし、学習意欲を高めていけるような授業を構想する。つまり、他教科等の学習でも行われている課題解決的な要素を含む学習スタイルを外国語活動にも持ち込み、子どもにとって受け身型の学習から能動型の学習への転換を子どもの実態に応じて図っていかうとするものである。

ウ 単元の学習計画 (全5時間)

学習過程及び主な学習活動
【つかむ段階】(1時間) 1 外国の店やスーパーマーケット等の様子をビデオで見たり、ALTに話してもらったりする。 2 買い物の基本スキットを見る。 3 買い物の基本表現を使ったゲームを楽しむ。 4 自分たちの店を開く計画を立てる。
【挑戦する段階】(3時間) 1 基本スキットの表現を使ったゲームを楽しむ 2 グループごとに、自分たちの店を開く準備をする。(臨場感が溢れるような商品、紙幣、ポスター等を必要に応じて作る。ALTに尋ねたりして売買に必要な英語を基本スキットに付け加える) 3 グループ内で、売り手と買い手を交替しながら買い物を楽しむ。

4 他のグループの店に行って買い物を楽しむ。
5 他のグループで知った表現を、自分たちのグループの表現にも付け加える。
【振り返る段階】（1時間）
1 売り手や買い手を交替しながら、他のグループでの買い物を楽しむ。
2 グループごとに買い物の様子を発表する。
3 楽しかったことや自分たちが使った表現、気付いた表現などを話し合う。

この学習計画の特質は、単に基本スキットを使った活動を繰り返して英語表現に慣れ親しむばかりではなく、自分たちの必要感に応じて、言いたい英語の発話を広げていき、活動を楽しみながらも探究的な学習になるように設定されているところである。もちろん、活動を繰り返す中で外国での買い物のしかた等を知り、特有の文化に体験的に触れたりすることも含まれている。

エ 1 単位時間の授業の実際

全5時間扱いの3時間目（「挑戦する段階」の2時間目）の授業展開について述べる。本時のねらいは、ゲームを通して基本スキットに親しむことと、自分たちのグループの店を開くのに必要な英語表現を考えて、ALTやHRT、友達との関わりの中でそれらの表現を獲得していけるようにすることである。

学習過程及び主な学習活動
【つかむ段階】（10分）
1 あいさつをする。
2 基本スキットを見て、やってみる。
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> A, B : Hello. A : May I help you? B : ○○, please. A : OK. Here you are. B : Thank you. How much? A : ○ dollars, please. B : OK. Here you are. A : Thank you. Good bye. ・ALTを相手に、2～3人やってみる。 </div>
3 めあてを確かめる。
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> スキットに必要な言葉を付け加えて、店を開く準備をしよう。 </div>
4 学習の進め方を確かめる。

つかむ段階では、本時の学習への意欲付けを因するため、まず、基本スキットをALTとHRTで見

せて、前時までの学習を想起させる。そして、意欲的な子どもたちに、スキットへ挑戦させることにより、他の子どもの意欲も高めるとともに、スキット表現を繰り返し聞かせることを心がける。そして、本時のめあてや課題追究の方法を確認して、子どもたちが見通しをもって学習を進められるようにする。

【挑戦する段階】（25分）
5 基本スキットを使ったチャンツやゲームをみんなで楽しむ。
<ul style="list-style-type: none"> ・ワードチャンツ ・センテンスチャンツ ・カードゲーム ・マジックワードゲーム
6 グループごとに店を開く準備をする。
<ul style="list-style-type: none"> ・自分たちの店で買い物をし合うために必要な言葉を考える。（商品の名前、呼び込みや値段の交渉、おすすめ品の言い方など） ・ALTやHRT等との関わりを通して必要な言葉の言い方を知る。 ・自分たちで考えたオリジナルスキットを使って、グループ内で買い物を楽しむ。

挑戦する段階で、まず、基本スキットを覚え込ませようとするのではなく、活動を繰り返していたら自然に身に付いているようにするために、いくつかのゲーム的な活動を組み合わせで行う。子どもたちにとっては、楽しいことが学習を意欲的に進める大前提であるので、とにかく楽しくみんなのできるゲームや遊びを準備する。このゲームや遊びを続けるために、どうしても英語を発話せざるを得ない状況や場面を設定することで、子どもたちは自然な形で英語の発話を繰り返し、その中で英語の音声や表現に慣れ親しみながら必要な表現を身に付けていくのである。

次に、コミュニケーションへの積極的な態度を養いながら、課題解決的な学習活動をこの段階で展開する。各グループでオリジナルな店を開き、その店での買い物を楽しくするために、基本スキットの表現に加えて、子どもたちはそのグループ独自の表現を欲するようになる。このときの教師の関わりが大事なポイントである。ALTとHRTのTTで授業を進めている場合、HRTに「これは英語で何と言えばいいですか」と尋ねてきたとしても、すぐに回答しないで、何とかALTとの関わりで子どもの課題が解決できるように働きかけることが大事である。ここで、子どもと一緒に

にALTへの尋ね方を考えるようにする。つまり、子どもに学び方を学ばせ、子どもたち自らが課題に応じた学習を進め、それを解決する喜びを味わえるような展開の工夫をするのである。以下は、子どもたち自らが生み出した、ALTへの関わり方の例である。

- ・実物や模型を示す。 ・絵を描いて尋ねる。
- ・ジェスチャーや表情で訴える。
- ・自分の知っている英単語をいくつか並べてみる。
- ・日本語と英語を組み合わせる。
- ・(事前に指導した)「What's ○○ in English?」を使って尋ねる。
- ・これらの方法をいくつか組み合わせて尋ねる。など。

そして、以下は子どもたちが実際にALTとの関わりによって獲得した英語表現である。

- ・ Please, come in. ・ Please, come again.
- ・ Discount, please. ・ ○ dollars change.
- ・ I'm just looking. ・ Do you have ○? など

もし、HRT単独の授業であったとしても、HRTが一人二役を演じてALTへの関わり方を学ばせることは、活動や発話に広がりをもたせるためにも必要なことである。

このような関わりを通して、子どもたちは自分たちの活動を積極的に行っていくために必要な英語表現を身に付け、コミュニケーションのよさや大切さを実感しながら積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を自ら育てていくことができると考える。

【振り返る段階】(10分)

- 7 グループでの買い物の様子を発表する
 - ・ 2～3グループの発表
- 8 本時の学習を振り返って話し合う。
 - ・ 楽しかったこと
 - ・ グループ内の発表で使った言葉
 - ・ 発表を聞いて発見したこと など
- 9 次時の学習について知る。

振り返る段階では、グループ発表などを通して、自分や友達の活動の成果を確認し合うとともに、さらに別な表現にも気付いていけるようにする。そして、単に楽しいばかりではなく、楽しさの中でさまざまな英語表現に触れたり新しい発見をし

たりした自分自身のよさにも気付かせ、次の時間の授業への意欲も継続できるようにすることが大切である。

6 研究のまとめ

ここ10数年の英語活動の取組の状況、並びに平成23年度から完全実施される新学習指導要領の趣旨を踏まえた外国語活動の授業の在り方について述べてきたが、1単元や1単位時間の授業の中で、子どものもつ課題を子ども自ら解決していけるような課題解決型の授業展開を進めることは、子どもにコミュニケーション能力の素地を養う方法の一つとして今後有効に働いていくと考える。

ただ、この方法は、これまで行われてきた英語活動の授業づくりの趣旨を生かしながら、その地域や学校、子どもの実態に応じて柔軟に取り組んでいくべきもので、この学習を行うことで子どもに英語嫌いをつくってしまうなどの逆効果もあり得ることを考慮すべきである。

今後は、5・6年生の学習内容の系統性にも配慮しつつ、この課題解決的な学習の展開が、どのような学習経験を積んだ子どもたちにより効果的であるのか、学習のどの段階でどのように持ち込めばよいのか等について実証的に追究していきたい。

引用・参考文献

- 小学校学習指導要領解説「外国語活動編」平成20年8月 文部科学省
 中学校学習指導要領解説「外国語編」平成20年9月 文部科学省
 高等学校学習指導要領解説「外国語編・英語編」平成22年5月 文部科学省
 「英会話年間授業プラン」平成15年 鹿兒島大学教育学部附属小学校